
WARS一GENERATION外伝第08特殊武装機動小隊

アル・トライア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WAR S I G E N E R A T I O N 外伝第08 特殊武装機動小隊

【コード】

N 9 1 9 0 T

【作者名】

アル・トライア

【あらすじ】

交わってはいけない禁断の世界で繰り広げられる戦い…… W A R S
I G E N E R A T I O N

これは、世界の歴史の影に隠れたもう一つの戦記

WAR S I G E N E R A T I O N 外伝

第08 特殊武装機動小隊

君はこの戦いの果てに新たな勇気の姿を見る……

第一話 新部隊始動（前書き）

この作品は本編とリンクしています

まだ本編を見ていない人は先にそっちを見てください

第一話 新部隊始動

時空管理局ミッドチルダ地上本部

スタ……スタ……

その廊下を歩く二人の人物がいた

「……突然の呼び出しか……嫌な予感しかしないんだが……」

そのうちの一人で、陸士108部隊の士官である“シロー・アマダ”はボヤキながら歩いていた

「大丈夫ですよ……たぶん……きっと……うん……」

そして彼の隣を歩くのは同じ108部隊の隊士である“ギンガ・ナカジマ”……この部隊の部隊長の娘であり、ジークフリートに所属するスバルの姉である

「説得力が全く無いぞ……まあいいや、さっさと行こうか」

「そうですね……」

そう、現在彼らは部隊長である、“ゲンヤ・ナカジマ”に呼び出されていたのだ

「はぁ……不安だ」

「まだ言ってるんですか……まあ、気持ちは分かりますけど……」
2人の頭の中には最早、不安しか残っていなかった

部隊長室

「……つまり、お前さんの所で開発したアレをアイツに渡せばいいんだな？」

『ええ……よろしく願いしますよ部隊長さん……』

「よせよ……お前さんの敬語はなんか気持ち悪い」

部隊長であるゲンヤが誰かと通信で話していた

『気持ち悪いとはひどいな』

コンコンッ……！

「おっと、どうやらアイツ等が来たようだからまた後でな」

『わかった、それでは例の件、よろしく頼むよ』

コンコンッ……！

ゲンヤが“彼”との通信を切ったところで再びノックの音が部屋に響いた

「ああ、開いてるから入っていいぞ」

「失礼します」

「おう、よく来たな二人とも！まあ……そのソファーにでも座ってくれ」

扉を開けて入って来た二人に対して、ゲンヤは軽い口調で挨拶をすると二人にソファーに座るように促した

「いきなり呼び出して、何かあったんですか？」

「そうですよお父様」

「まあ、その事について話すからちよつとコイツを見てくれや」

そう言うとゲンヤは一束の書類を2人に渡した

「これは……」

「もしかして……」

その書類に書かれていたのは“新型武装実験開発計画”外部提供された新型武装、通称 Arm's device の運用試験の計画だった

「まあ、察しの通り……新型武装についての計画書だ」

計画書を読んで驚くシローに対してゲンヤはあっけらかんと答えた

「単刀直入に言おう……お前さんには、このデバイスの運用試験部隊の隊長をしてほしいんだ」

すると、ゲンヤは真剣な顔つきになり、シローにそう告げた

「俺がですか？」

突然の一言に当惑するシローに対してゲンヤはさらに驚愕の一言を放った

「ああ、といつてもこいつは技術開発局から直々の指名で……もう既に部隊設立の準備は整ってるんだ」

「……それじゃあ、拒否権なんて……」

「最初から無いな」

「分かりました……受けますよ、その仕事……ハア……」

ゲンヤがやはりあっけらかんとした調子で答えるとシローは力なく承諾した

「まあ、そんなに落ち込みなさんな……試験部隊と言っても決まっ

ている隊員は隊長のお前さんと副隊長のギンガだけだ」

再び衝撃的な一言を言い放ったゲンヤに反応したのはシローではなくギンガだった

「ちょっと待って下さいお父様！そんなこと私は聞いてません！」

「ああ、だって今言ったからな」

「そんな……適当な」

疲れきった表情のギンガをシローは呆れながらも励ました

「諦めるギンガ……」

「そうですね……」

「そうだ、人生諦めが肝心だ！」

「「はあ……」」

部隊長室には疲れた表情の二人と高らかに笑うゲンヤという端から見たら笑えない空気が流れていた

「さて、話はここまでだ」

隊長室内の空気が戻ったところでゲンヤがそう言った

「ところで肝心の新型デバイスはいつ受領すればいいんですか？」

「おっと、忘れてた……アマダお前さん、明日の午後から技術管理局の第06技術班の研究室に行ってくれ」

シローの一言で忘れてたことを思い出したゲンヤは付け足したように言い放った

「あ、明日ですか……」

「ああ……だから今日はもう下がって良いぞ……おっと、ギンガは残ってくれ」

「はい」

「分かりました、それでは失礼します」

そう言うとシローは隊長室から出て行った

「さて、お前さんを残した理由なんだがな……」

「大体分かっています……お父様、さっきの試験部隊の話でアマダ三尉に話していないことがありますよね……」

シローが去った部隊長室内には先程とは少し違う張り詰めたような空気が漂っていた

「やはり、バレてたか……実はな今回の実験部隊の設立を依頼して来たのは、開発局じゃないんだ」

「え、それじゃ……さっきの話は……」

「いや、アマダのことを技術開発局側が指名したのは本当なんだが……部隊の設立を命じたのは……管理局のお偉いさんだ」

「どうして……戦闘には全く関係ないのに？」

「表向きはさっき説明したように新型デバイスの試験運用のためなんだが……実際はどうやら、チビ狸の部隊みたいな滅茶苦茶な部隊を作ることが目的らしい」

「意味は分かります……ですが、それならアマダ三尉に秘密にすることは無かったのでは？」

ギンガがそう問うとゲンヤは表情を険しくしながら答えた

「それが、上層部の駒だとしても本当にそう思うか？」

「それって……」

「ああ、つまりやつこさん方に好き勝手に使われる部隊……つまりは駒ってことだな……」

そう言うとゲンヤとギンガは苦い顔をした

「まあ……そんな顔をしなさんな。お前さんには、この部隊の副隊長として内状報告と運用実験の内部からの妨害を頼みたいと思ってたんだからな」

「しかし、それでは今後のデバイス開発に支障をきたすことになる

のでは？」

「それは問題無い、解散後は実験をうちで引き継げるように開発局の代表には話を通してあるからな」

「そうですか、分かりました任せて下さい」

「まあ、その言葉を聞いて良かった……もう下がって良いぞ」

「はい、それでは失礼します」

そう言うとギンガは退室して行った

「さて、アマダはこの先色々大変だろうな……」

ギンガが退室した後の隊長室ではゲンヤがシローのこれからを人知れず憂っていた

翌日……

「迷った……」

時空管理局技術開発局の廊下でシローは迷っていた……

「しかも、俺以外に人が見当たらないし……はあ、困った」

「あ、あの……」

「だいいち、この施設は広すぎだろ」

「あ、あの……すいません……」

「フロントで地図でも貰ってくれば良かった……」

「すみませ……ん!!」

「う、うわああああ!!」

「キヤアアアア!!」

「って……え?……ビククリした……君は?」

「え?」

考え事をしながら廊下を歩いていたシローは背後から聞こえた女性の声に驚いて振り返った

「……ああ、すいません、お困りのようだったので声をおかけしたのですが……驚かせてしまったようですね」

「いや、こちらこそ考え事をしていたみたいで気づかなかったよ、
ゴメン」

「いえ……それで、どうなさったんですか?」

「実は、第06技術班の研究室に行きたいんだけど、場所が分からなくてね」

「第06技術班ですか……私も今からちょうどそこに用事があるので、よろしければ案内しましょうか？」

「本当かい？是非ともお願いするよ」

「フフ……それでは行きましょう」

こうしてシローは女性の案内を受けることになった

「そういえば、自己紹介がまだでしたね……私はアイナと言います
二人でしばらく歩いていると突然女性が思い出したように自己紹介をした

「アイナさんか……俺はシロー、シロー・アマダだ」

「フフフ、私のことはアイナで構いませんよアマダさん」

「そうか、だったら俺のこともシローって読んでくれア、アイナ」

「ええ……では、コホン……シ、シロー」

こうして、お互いに名前呼び合うようになった二人だったが、その場の空気が初々しい恋人同士のような、なんとも言えないものになっていった中で不意にシローが尋ねた

「そういえば、アイナも第06技術班に用事があるって言ってたけどそれって?」

「実は、兄に呼び出されて手伝いのために向かっているんですよ」

「なるほど……それじゃあアイナのお兄さんも研究者なんだ?」

「はい、というよりもその主任なんです」

「それは、すごいな」

「はい! 自慢の兄です」

「ハハハ、お兄さんのことを話しているアイナは本当に嬉しそうな表情をしているね」

「え……? そ、そうかしら……そう言われると少し照れますね」

最早恋人同士のような談笑をしながら研究室までの道のりを二人は歩いて行った

「着きました、ここが第06技術班の研究室です」

「そうか、ありがとうアイナ」

「いえ……それではお先にどうぞ」

技術開発局の長い廊下を歩いていた二人はようやく第06技術班の研究室前にたどり着いた

「失礼します、シロー・アマダ三等陸尉です！新型デバイス受領のため陸士108部隊より参りました」

「よし、入りたまえ」

「ハッ！」

「あの、アイナですが中に入ってもよろしいですかお兄さま？」

「ああ、お前も一緒だったか……入ってくれ」

「はい」

こうして二人は研究室の中へと入って行った

「それでは、自己紹介をしようか……と言っても君には必要無いだろ？シロー・アマダ三尉」

「ギニアス？……ギニアス・サハリン！」

「フフ……久しぶりだなシロー」

「ああ、まさか君がここの開発主任になってたなんてな」

研究室に入ったシローを待っていたのは旧友であるギニアスとの再会だった

「ん？………という事は……まさか………」

そこでシローは、なんともいえない違和感を覚えた……

「そう………君が考えてる通り、君と一緒に来たアイナは私の妹だ」

シローの言いたいことに気がついたギニアスは彼の言葉を遮るように先に答えた

「冗談だろ？」

「まさか………私が嘘をつくとても？」

「………本当かい、アイナ？」

「はい、それよりも私はお二人が知り合いだったということに驚いているのですが………」

ギニアスの言葉の真偽を確かめる為にアイナに尋ねたシローだったが、彼女の口から返ってきたのは肯定の言葉と新たな疑問だった

「アイナは知らなかったのか？私とシローは昔の事件の時に協力してから親交があるんだよ」

「ああ………あの事件はひどかった」

アイナの疑問にシローとギニアスは昔を思い出して懐かしんだ

「何か……あつたんですか？」

「今から3年前にあつた“V・B事件”だ……」

「ッ……！！」

「当時の技術管理局が作り出した生体兵器が暴走し、局員や一般人に多数の死者を出した……あの事件だ」

「そう、そして俺たちはあの化け物を倒すために協力したんだ」

「そうだったんですかか……」

シローとギニアスの口から語られる衝撃的な事実にも、アイナはただ驚くばかりだった

「ああ……」

「……」

「……」

それからしばらくの間研究室には重苦しい雰囲気が漂っていた

「そういえば……あの事件の時に二人は一度会っているはずなんだが」

「「え……？」」

「その反応を見る限りどうやらお互いに覚えていないようだな」

不意にギニアスが放った一言によってそれまで漂っていた重苦しい
雰囲気は消え去っていった

「まあいい……それでは早速、新型デバイスの稼働実験を行うぞ」

こうして、もう一つの物語は動き出す
正史の裏で繰り広げられる一人の男の外伝は一体どのような結末を
迎えるのだろうか

T o b e N e x t S t o r y ……

第一話 新部隊始動（後書き）

君達に最新情報を伝えよう！

ついに起動実験が始まり、姿を見せる新型デバイス

果たしてシローは、これを起動させることができるのか……

次回、「E Z - 8 起動！！」にアクセス承認！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9190t/>

WARS—GENERATION外伝第08特殊武装機動小隊

2011年10月9日00時39分発行